



へき10
2962
7

和書

こころおこいさめのもろり愚明こころ毎頁

の字ありこころい 強の字之馬の力強 吉田とやも母のや体い

ぬるり
了れ不愚明口の強弱りと手繩を以て右 ちるとれこりき拙く人の力あ
けはも前後と同く馬藝の上よりその ちるよべうげとあるべし。繁
へき馬といはち ちるよべうげとあるべし。繁

とあふ。そのををいさへうと。げ用と忘れさるを。
ちるよべうげとあるべし。繁
ちるよべうげとあるべし。繁

不堪 非家 ちるよべうげとあるべし。繁
ちるよべうげとあるべし。繁

和書

堪らむといへども。堪能の好家の今より。お時あまする
 ゐいた申さるる。つーしを。うろくくせあま。ひまふよ
 自由さるとの。びとくぬあり。藝能の化のこよあ
 じおゆ。ころ振舞。ふづも。思ひてはくしめる。わ
 おろりて。團聖作。くも。曾増。増進。みて
 鳥実をえつ。のよ。一貫の。傳を。傳より。き
 まき。も。真の下。男の。悪。よ。入。て。善。よ。入。ま。り
 樂。舞。も。悪。も。男。下。男。の。至。極。也
 たく。も。り。て。蘇。秦。張。儀。の。法。た。く。も
 なる。こ。ろ。也。い。ひ。然。も。お。り。い。つ。り。り。か
 ひ。ま。く。る。の。ゆ。え。男。て。對。難。よ。か。く。れ。り。 (頁十八)
 世。の。た。つ。き。 (圖) た。つ。き。い。た。り。か。古。今。あ。よ
 を。遊。の。た。つ。き。し。あ。ぬ。山。中。に。お。か。つ。る。も
 一。つ。も。ち。う。か

學問して因果の理をも

十八

たり。從經をりて。世海のころきたせよといひたれ。

ころのまゝに。從經師より。人。為。先。馬。は。業。也。

くら。輿車も。あ。の。方。の。導。師。は。徳。を。れ。ん。時。ち。ち。と
 聖。よ。を。と。務。く。し。ん。母。も。も。ち。う。り。そ。ち。ち。ん。ん。う。う。く
 と。あ。ひ。り。り。次。は。仙。の。後。酒。を。と。す。む。ら。と。あ。ん。よ。法
 師。の。ま。下。に。能。る。ま。き。檀。那。を。さ。し。思。ふ。へ。と。そ。ま
 子。依。團。今。の。小。ち。れ。敷。る。く。一。新。樂。催。馬。樂。の。甲
 ころ。早。秋。あり

せ。の。の。ま。い。や。く。い。ま。ひ。み。入。れ。い。よ。く。い。ま。く

文ありゆるるるげとくき銭のやうくさひさるやうに一大

緯則有切 論語陽貨篇

一大事因縁 法華經三世尊唯以一大事因縁故

今日の事とあるさんと

出見於世 一一大事の二字摩訶止觀の第一

又見注釈あり

急用して是も世の多かりぬ事とてあ

ちこりしゆきれうりしゆき

仍人の 鄧侯挽不精 解令推不表

なめぬ人のあり 愚明たのこもぬのあり

事てまざれくし 侍人おさりありて

とあたのこもものこもたぐひく

さひぬまうりうりうり

とんく

とんく

とんく

年の事もかみりし。坐のるも。又さうあり。うのそ
のあり海一がさうひゆく。ちやよのつうたうぬ
るもあまの。漆拍の定う。ち定とんぬぬの。漆
てたうら

妻といやののう 野南史齊何照隱居不仕絶

昏何尚之強為娶任氏礼畢將親野弟泣未

執本心遂罷隨老又娶魯曾國隱者孔嗣女離

其亦不與妻相見列字以處之入莫論其

意張肅為詩 卿之日措辭何外士薄春書

浩 中宗朝裴談崇奉狄氏妻俾始談畏

之弊 漢有可畏者三少之時相之如生菩薩

安有人不畏生菩薩及男女前視之如九子

魔母安有人不畏九子魔母至五六十薄施粧

粉或青或黑相之如鴛盤茶安有人不畏鴛

盤茶 本車詩及 太平廣記

推がう穿にぬぬるも。み

疑而未定之人也

人なれば何ともおもはるる

ふとつけぬ人なればいささかおちつらなくおぼしき人なれば

ひあひあはれぬ。あまのこもあはれぬ。あはれぬ人なれば。又

又まじりくはさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

又まじりくはさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

やまのり人のまゝ。又まじりくはさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

らげよ打うらむ。はさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

又まじりくはさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

モリ

と。おちしねむ。はさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

又まじりくはさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

おちしねむ。はさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

又まじりくはさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

おちしねむ。はさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

又まじりくはさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

おちしねむ。はさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

又まじりくはさくはさくも野以誤謄誤
唐風彩笺の笺をよみんものけいすめを
海とくくおちしねむ。今

よきものなりけり。あてはるる人々のまがら

まがらをえんと。掌の上此物を。かんのとも。ゆるやう乃

掌の以の物野 天眼才一の阿形律三千世界 とある事神掌の以の菴麻手草とあるが 推量して仏法すてをさ 如示諸掌乎 俗語ありあり

コ我繩手 愚明 伏見の西 百空あるひくこがきいて 此人久我繩手を直りる 本造の地を野本としてつられる地を直り

よ小神又大口はるる人本つらの地を。田の申はる とひいてて念はよ洗多。ゆるがくくる程よ。稲家の

男三三人出きて。あてはるる人々のまがら

七ノ

いよなり。久我内大臣のそらかりなる。よのつひよあ

いよなり 愚明 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる

久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる

久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる

久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる

久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる 久我内大臣の 久我内大臣のそらかりなる

後中葉萬騎出林詔言入言 注師古曰 詔者

おほ社取て 警蹕いづけ

の守外掾目の三のふあり職原はるる

政事要畧百三十卷あり唯宗九亮撰記

公務文習紀詳雜事至要臨時雜事等

後唐はたてて城の城ありあつて云々

の時はつらつらなれり七夕の夜も秋も

世ありてつねに云々ありて云々

呉竹野晋戴淵之竹譜植物之中有石

不系非草非木小異空實木同節自或

或挺山石陸條暢紛敷青翠森肅實

忌殊完云云厥族之中蕪麻特奇脩

本葉繁枝凌層独秀其葉紛披實

河竹六百番定家傳名方河竹のちひ

呂北ききりしとやき

呉竹の系やそく河竹の

美ひろし河竹より

河竹仁壽殿のあまより

極られるは呉竹あり

退凡下系の卒於婆外

るる下系内なる退凡

十月と神去月といひて神

仁壽殿拾菴云南殿小九間四面

禁秘抄に仁

退凡西記九云如未御世

山廣説妙法摩訶説

無礙人徒自山林至

廣十餘歩長五六里中路有二

即王至此修行以進一謂

其山頂下乘王の車馬

そとにの幸於皇と云退凡

退凡外退凡山中なる

神去月神皇の比在

の神皇御記神皇正統記

一天下れ神皇御記

神皇御記神皇正統記

神皇御記神皇正統記

神皇御記神皇正統記

神皇御記神皇正統記

神皇御記神皇正統記

神皇御記神皇正統記

神皇御記神皇正統記

大師法隆寺の起造元亨杖書釋良源姓木津氏比叡山大詔勅後の起造

天元四年大僧正兼法務藤原師實永觀三

年正月三日聖武而滅年七十四賜諡慈覺

起造文の起造文と云文の起造文と云文

法曹の法曹の法曹の法曹の法曹の

律令と律令と律令と律令と律令と

明法博士二人明法博士二人明法博士二人

坂上中坂上中坂上中坂上中坂上中

兩家立兩家立兩家立兩家立兩家立

水火の水火の水火の水火の水火の

ひつとのひつとのひつとのひつとのひつとの

比叡山大詔勅後の起造

と云文の起造文と云文

め終るの起造文と云文

法曹の法曹の法曹の法曹の法曹の

の起造文の起造文の起造文

作の作の作の作の作の

入物の入物の入物の入物の入物の

世人の因次と云々の世人の因次と云々の世人の因次と云々の世人の因次と云々の世人の因次と云々の

世人の因次と云々の世人の因次と云々の世人の因次と云々の世人の因次と云々の世人の因次と云々の

後成恩寺殿日本紀築躰水火見天生之物無分別

保淨神事何世日火鐘是摩因物而機故不

使應國檢非遠使別面の唐名之

大理國檢非遠使別面の唐名之

兩牛食而後出者俗日回咄和名日爾雅集注

云獻春遊遊及出而噉牛日語音合唐韻有聲

其具温之物

又の相國公孝の又之政大臣實基之

大禮妖典人與九諸般鬼神之旺皆由人心變之以

の別面の時中の使應國

評定之と云の程又家

人章過牛之と云の程

ゆり入て大禮のと云の程

ゆり入て大禮のと云の程

ゆり入て大禮のと云の程

ゆり入て大禮のと云の程

ゆり入て大禮のと云の程

ゆり入て大禮のと云の程

ゆり入て大禮のと云の程

權謀兄大伴家持等が興るやとて
くましくあつたまふ日

王様もも喚子あのことさ

万の事いれむかへん

月又通くまきこゆ

いさむひありとて

系のといれへくまきこゆ

三思者徳也也

人いさく物をれゆふこま

終者比皆多也

いさむありといまほひあり

人皆廢もつたり

とてれむぐくまきこゆ

堅く先あるまの常格

財多くとてれ

財多くとて

財多くとてれ

財多くとて

子七十餘君無所野注後之記野
其論孔子聖賢諸國莫能用謂周鄭齊宋
曹衛陳楚杞魯國等於歷亦無七十
餘君也

論語論語不孝短命而死

君の痛も

韓非傳は衛太子環が君の車にのり櫛の餘

とてれむぐくまきこゆ

不孝なりき

不孝なりき

不孝なりき

不孝なりき

不孝なりき

不孝なりき

不孝なりき

不孝なりき

不孝なりき

亭主文婦 愚問 女姓するの客の中へはるり
ゆきくちうういふいぬは足利左馬の
母ハ時政のむとあり一故最ぬもぬとも
くまてりりたる後献より

隆辨僧正宗御不例之時致 ありひ二辨よあり三献り

足利の隆ぬとも今への加賀隆ぬとの教
ふりりいそやぬぬを在

用さうてさあぬとて 左馬入るの洞へ
前して女命たよゆ袖よてうせせせ

細せせそせい洞させろく老馬入るのあり
よしてうまの念をいひくゆきり

扱年ごんぬる足利の隆ぬとありいひとやられま

まの用さうてさあぬとて 隆ぬとありいひとやられま

女房たれ小袖とてうせせせて後よりいれたりぞ

付んる人乃ちうくまてゆりかうゆり

大福長者 前漢書 見天地之大徳 且生聖人之
木室曰世何以聚人 夫財者帝王所以聚人 乎世妻
成祥生泰 須天徳 治國家民之本也 聖賢科年
あり者を衣老しゆかてうていたとめる
者をりて天竺の復達長者 財蓋長者 富
る人へは 卒經りの衣者 窮子の 貧あり

方とさうをまてひとあり

徳とつて金さまづりてい

いりりひきぬあるのこを人

とひ徳をほんとありはと

ゆきくちうういふいぬは足利左馬の

母ハ時政のむとあり一故最ぬもぬとも

くまてりりたる後献より

とよのこころをうたへてしむらびとあへくやげぶしませの
穴もさうらうらげ上子 かしこまよあさありと呂律

呂律ののよかかいらの^{首楞嚴經云}壁言
如琴瑟笙篳篥琵琶鐘有妙音若無妙音終
不能死發汝身衆生亦復如是^{思明}是より別後
あしるがかり

思れ失ふあはれとやう

天王寺^野推古天皇沙宇聖徳太子建治^{三十四}何ものもあまのやうく
多摩持國増長藤原の^天天の儀と安置と
伶人^野音樂する者を云黄帝の時伶倫と云く
樂人あつたよりして世は伶人といひ
あ寺^御天王と云はれ

まもれ^{れい}伶人のやけい^いあがの樂はく國をまへおきて

七ノ

抑の移のめてくくさのかり けりるのあよりもまくれ

はくせ
六時堂

黄鐘^御のしきり^御源順八月十八日兼れ

こよひ^御秋れをるりなりなり

和^御暑^御思^御明^御をい水気としてわらぬよを

聖^御靈^御舎^御鈔^御太子の思^御明^御二月廿二日

いづの^御声^御もその^御へ^御鈔^御どくの^御へ^御の^御烟^御の

諧^御無^御相^御奪^御倫^御

丸^御座^御の^御思^御明^御をより^御魚^御好^御り^御烟^御

無^御常^御の^御烟^御子^御平^御家^御抑^御格^御は^御独^御園^御精^御舎^御の

旗^御園^御精^御舎^御の^御無^御常^御院^御大^御蔵^御一^御覽^御第^御二^御云^御經^御律^御

異^御相^御云^御佛^御大^御祖^御越^御須^御達^御多^御長^御者^御居^御合^御衛^御園^御堂^御施^御

孤^御獨^御故^御云^御給^御孤^御獨^御因^御住^御王^御舍^御城^御護^御跡^御長^御者^御家^御為^御

まゆへ^{たい}太子の^御内^御府^御の^御國^御今

に^御ゆ^御を^御ま^御を^御と^御は^御い^御り^御ゆる

六^御時^御堂^御の^御あ^御れ^御鐘^御と^御そ^御を^御奏^御

鐘^御調^御の^御し^御き^御り^御を^御室^御を^御奏^御よ^御鐘

ひく^御あ^御が^御り^御さ^御ら^御あ^御え^御き^御あ^御よ

二月^御但^御槃^御舎^御より^御屋^御瓦^御と^御云

ま^御の^御申^御る^御を^御揚^御笛^御と^御は^御給^御は

今日しりしり愚明と日むりたりと云を以

見しよし

はけとの鈔上りしあり致免のつけ押とあり

一よりある事と推察はる事礼の目より日よりしと常はる及び物

とのよみくれば出立とて方のりより一物

とよりけりる事やある事野野祭礼の

時よりありのつけりの上は致免のつけりも

りのとありも是こ

遊野野衣服車馬勢れりより皆御令り

志どのの今日もかろり給るにげらるつけもの年を差

てさるたとのかよはて方のねもさ物を多くはけて

たこれ神を人よのせせとつらながことよよもいひ

さつぎにさしむありと念ふにさるる

